

よる本来の学校経営組織となっているものは少なく、ほとんどが病院経済におんぶされている状況である。女子のみに与えられている看護教育の場が大学等に於ても認められていないことは遺憾に思う。総合大学には必ず衛生看護学科を併設し、将来看護学士を送り出す程度の制度の確立を希求して止まない。

臨床実習場における改善案

1. 臨床指導者に関して

各科主任看護婦を学生の臨床指導者に充当し学長辞令を受けている。しかし各病棟に病棟婦長制度をとっていないため、主任看護婦がこれらの業務を兼ねている現状にあって、学生指導のみに重点を置く事は不可能な状態である。臨床側として今これら後の点に対する思案としては、新制度の

卒業生の中から有能な人材を選び、更に高度な専門教育を身につけ各科各病舎に配置し(規定人員外に)、学生の臨床指導面を担当するような方向にもってゆきたいものと望んでいる。

2. 管理面について

結核及び小児、産婦人科に於ける各病舎以外は各科患者を一病棟に混合収容している関係上、担当医師も数多く患者の移動もはげしい。したがって、看護能率が低下し、設備の面においても中央化が進んでいない現状で看護力に不足を来している。以上の点で看護学生が実習に当たった場合に、ともすれば一貫性に欠けた看護内容に傾き易いきらいがある。市当局の懸案として明後年度より新しい病院が設立される事に決まり、管理面におけるこれらの問題点は殆んど解決されるものと考えられる。(筆者・京都市立看護短期大学)

編集デスク <6>

正月に映画「ベン・ハー」を見た。映画を見るという体験が、私の生活のなかから切り棄てられてしまっただけに久しい。医学書院の編集の仕事をするようになる頃から、現実の問題として、映画の世界には無縁になった。新聞などに出る映画の題名と、女優の名前を見くらべてみたりするだけであった。

5 年前に、ヨーロッパ旅行をした時に、久しぶりに映画を見るという体験が、生活のなかによみがえった。その時に、たしかロンドンで見た映画にマリリン・モンローの出でくる「7 年目の浮気」というのがあった。ベルリンで見たのに「マラヤ」というのがあった。「7 年目の浮気」は日本に帰って来てから、しばらくたって上映された記憶がある。ロンドンでは、まわりの観客が笑い出してから、しばらくたって私も笑い出すという仕儀であった。これでは、どうも蛍光灯である。

帰国してから、また映画には全く無縁の存在となりおおせた。映画館へ出かけてゆくなどという暇はとて

もない。テレビで、映画をやることがあるが、残念なことには、それも利用できない。テレビの番組をのぞいてみる興味はあっても、実際に見ることはできないから、テレビは専ら子供と女房族のためののみある。したがって、新聞の中で一番私に無縁な頁は、テレ番である。こういうことばがあるかないかしらないが、わが家のテレビ・ファンはテレ番と呼ぶ頁を愛読しているようである。

正月に「ベン・ハー」を見るの記 長谷川 泉

その私が、今年の正月は上映時間 4 時間に近いという「ベン・ハー」を見た。たいへんな勉強であり、一念発起である。だが、これは、実は私が選んで、映画館に足を運んだのではない。なかば強制のようにして映画館に足を運んだのである。好ましい強制である。

医学書院の幹部が皆で「ベン・ハー」を見るということになったからである。切符は会社で買い、夫人同伴ということなのである。子供もまじった。久しぶりに、映画館に腰を

おろして映画を見るという生活感情があるが、私によみがえったのである。最初の音楽で私の胸は、初心の恋心のようにわくわくした。タイトル・バックの文字が初心の恋心のように、大きな期待で震えた。「ベン・ハー」は、久しぶりによみがえった私の映画情熱を満たしてくれた。広大な視野にひろがって、ダイナミックな画面と、立体的な音楽に迫力があつた。初心の恋心のようにわくわくした私の期待は満たされた。

生涯に消し難い印象を与える契機はおのおのの人生行路にいくつかあるであろう。現実の生活体験であることもあり、芸術作品を通してであることもあろう。すぐれた芸術作品は、人の心に消し難い印象を刻んで生涯の転機を形づくるようなことすらある。「ベン・ハー」は、そのような迫力ある映画であった。これは頼まれて宣伝しているのではない。どうも、また私の生活に、映画と無縁の時間が継続するような予感があり、予感だけではなしに、それが現実であるから、このことは、ちょっと書いておきたいのである。誰か、また、私を好ましい強制に陥れる者はないだろうか。